

鎌倉・九条の会 ニュース

第4号 2009年7月発行

鎌倉・九条の会

TEL: 0467-24-6596

FAX: 0467-60-5410

0467-24-6577



Email: iza@kamakura9-jo.jp

HP: http://www.kamakura9-jo.jp

鎌倉・九条の会 発足4周年 人間らしく生きられる社会を! 湯浅 誠 ・ 小森 陽一 ・ 内橋 克人

鎌倉・九条の会 発足4周年の〈憲法のつどい〉語り合う「人間らしく生きられる社会を！」が五月三十日、鎌倉芸術館大ホールで開かれました。講師は湯浅誠さん（NPO法人自立生活サポートセンターもやい事務局長・「年越し派遣村」村長）／小森陽一さん（東京大学大学院教授・「九条の会」事務局長）／内橋克人さん（経済評論家・鎌倉九条の会呼びかけ人）。

この日のテーマへの共感といま、もっとも話を聴きたい湯浅・小森・内橋の三氏が講師とあって、千五百人の大ホールは満席となりました。アメリカ発の経済危機が世界におよぶなか、とりわけ日本で人々の生活が不安に沈んでいるのはなぜか――三氏の深い考察による語り合いから、問題の本質が浮かび上がりました。

参加者ひとりひとりが、憲法25条（生存権の保障）と9条（戦争放棄）を車の両輪として人々と連帯する活動をしていこうと決意をあらたにしました。



「まず内橋さんが登場し、会場いっぱいの参加者に感謝を述べ、「人間らしく生きられる社会」――私たちが切実に求めているそうした社会が可能であるためには四つの条件がいります」と語り始めました。

人間らしく生きられる社会であるための四条件

内橋 四つの条件の一是、安全な社会、経済的にも、治安上でも、そして精神的にも安全であること。二是生き方の選択に自由があること。三はともに生きていくなかで社会的排除があればなくすこと。四にこれら三つの条件が持続することです。以上四つのことは、いわば生存条件というものです。

「一つ一つで小森陽一さんが、たゞいま内橋さんから、きょうのテーマを考えていくうえで基本に置くべきことを出してくださいましたとして、話し始めます。」

小森 「百年に一度の危機」などといわれているいまの状況をどう受け止めたらよいのでしょうか。百年に一度といいますが一九二九年の世界恐慌からは八十年です。真正直に百年としますと、昨秋のリーマンショックであられた金融危機の数カ月後、

予想もしなかったアメリカ自動車産業ビッグスリーが崩壊しましたが、フォードシステムによる自動車資本主義が稼動してから百年目です。

私は、夏目漱石を専門的に読んでいますが、漱石の小説『それから』が書かれて今年百年目。小説には日露戦争後の景気低迷、金融危機で傷ついた人々が登場し、国会議員逮捕、日糖事件など政財界疑獄事件が出てきます。

百年に一度：：ということを真正面から受け止めた場合、現在の「危機」的状况によって、私たち社会の何が壊されてしまっているのか、先

程の四つの条件がどうなっているのか、本論に入っていきたいと思えます。

生存条件と生産条件

内橋 きょうの設定されましたテーマはとてもすぐれていると思います。いま、人間らしく生きていくのはとても難しい。先程申し上げました四つの条件、これは生存条件でありますが、その一方に反対概念として生産条件というのがあります。

社会が未成熟な時代ですと、資本で物をつくる生産条件をよくしなれば、人々のよい生活はないんだ、生産条件をよくすれば生存条件もよくなるというすんでいきます。戦後しばらくはそういう時代でした。しかしやがて、生産条件と生存条件は対立するようになる。高度成長下、さまざまな公害問題、社会的なひずみが出てきます。そしていまはどうか。今日的な意味で生産条件をよくするといつて、例えば派遣切りがあったり、雇い止めがあったり、人々の生存条件はおとしめられています。生産条件優先で、人間らしく生きられる社会のための四条件がこわされ続けていきますと、人々のあいだで同じ社会に生きているという意識が

うずれていきます。

小森 自動車産業を中心とする資本主義が伸張し、地球環境破壊の大きな要因をつくったことに見られるように、二〇世紀の資本主義はいつも生産条件優先でやってきました。

アメリカ型資本主義がまわり始めて、最初の危機をきっかけとして、人類は第一次世界大戦を、一九年世界恐慌に関しては第二次世界大戦を経験しました。人類の歴史を振り返ってみると、人間の生存条件を真っ向からつぶすことで、生産条件を整えるというかたちしか人類はとってこなかったのではないか。もしいま三度目の大きな危機で、歴史が繰り返されるとすれば、戦争は必至という局面に立っていることになり、ます。ですから私たちは先程内橋さんが提起された四条件を生かすことをとおして、どうやって生存を最大に脅かす戦争への道を回避することができるか、考えていきたいと思えます。

小泉構造改革が 経済社会をゆがめる

内橋 百年に一度の危機といういは、さまざまなトリックを使う材料として用いられていると思えます。危機はそのつど新しいのです。

いま世界同時危機をいわれていますが、一九二九年の世界恐慌が繰り返されているわけではありません。

現在の危機の震源地はアメリカですが、太平洋を越えて津波が押し寄せ、私たちがバブルをあおったわけでもないのに、どうして日本がとりわけひどい状態になったのでしょうか。湯浅さんが支援に奔走していらっしゃる派遣切りに遭った人々、年金・医療の心配な高齢者、将来に希望をもてない若者たち、多くの人々が深い不安のなかにいます。

まず考えられるのは、小泉構造改革が新たな構造問題を生んでしまったことです。不均衡経済になってしまいました。その一つのあらわれが労働の解体です。「規制緩和」「あるいは「官から民へ：：」「聞こえはいいのですが、「民」のなかに国民はいるのでしょうか。民間巨大資本のことではないですか。多様な働き方をとする時代といつて、二〇〇三年に規制緩和され、非正規雇用が広く認められるようになりました。そこに働く側の選択の自由があったでしょうか。働く自由ではなく、働かせ方の自由だったのです。

小泉構造改革は二つ目に、巨大な格差を東京と地方、超国家企業（グローバルズ）と地域の小企業（ロー



カルス)との間に生み出しました。日本の代表的グローバルズーO社は年間外貨(ドル)獲得高全体の三分の一を稼ぎ、三〇社でみると二分の一を稼いでいます。そうした超国家企業へむけて、あらゆる政策支援を集中、円安にしなければならぬから、一年半の間にドル買い円売りを三七兆円を投じて行いました。

このように支援されたグローバルズはいまどうしているか。派遣切りはするが、海外に滞留させた利益は昨年七月〜九月に二七兆円におよんだといえます。日本の法人税が高いからといってこれないといいますが、実行税率は半分ぐらいいで、たんなるいい逃れです。そして海外で何を行ってきたか。設備投資はわずかで、主として投機、さまざまな金融商品を買ってきました。

このようにグローバルズを援け、輸出依存の経済戦略をとり、先回のイザナギ越えという好況をもたらしましたが、社会保障的部分の後退もあって国内の私たちの生活がよくなったという実感は持てませんでした。

日本経済は人々が働いても働いても豊かになれない構造になってしまいました。新自由主義的循環の中で国民経済の自立的景気回復力が失われました。グローバルズ優遇の不均衡

経済になってしまった日本は、今回の危機で震源地のアメリカより大きく揺らぐことになったのです。ヨーロッパでは金融機関でダメージを受けたところはありますが、地域における人々の生活はむきだし被害を蒙っていません。"think small" "small" "小さいものから先に考える"というヨーロッパの人々に共通の社会観があるからでしょう。

もはやアメリカの個人消費にすぎたの景気回復は望めません。過剰消費の国アメリカ自体が変わろうとしています。



言葉のトリックに だまされない!!

小森 問題の本質がくつきりと見えてきました。景気は底を打ったといいますが、完全失業率五・〇%、有効求人倍率は過去最低の〇・四六、非正規雇用の失職二一六四〇〇人、まだ破局の序の口のような感じ。一五兆円の補正予算にしても、一時的バラマキとグローバルズを援けるようなものばかりです。自殺者がここ数年、毎年三万人以上、また人々が分断されている状況をどう変えていくか、先程の生存条件の四つを満たす社会を私たちはどのようにしてつくっていくのか、お伺いしたいと思います。

内橋 不均衡経済はいかに恐ろしいか。何が私たちの社会にかけているか。支配層の繰り出す言葉のトリック、レトリックをしっかりと見抜くことが大切です。麻生首相はいいました。日本には個人金融資産が一四八〇兆円もある。なかでも高齢者がたくさん持っているから、そのうちから若い人へ移転させ、例えば息子が贈与されたお金でマイホームを建てられるようにする…その場合、贈与税の非課税枠を一〇万円から六

一〇万円までにしたなら…というのです。しかし一四八〇兆円という数字の実体を「存じないのでしょか」。そのなかには個人事業主が資金調達のため歩積両立として金融機関に貯金している事業資金が入っています。それが四〇〇兆円ぐらいいります。多くの高齢者はそれほど持っていません。また個人金融資産といいますが、ローンを組んで多くの個人が借金を抱えているのが計算されていません。一四八〇兆という数字の実体は三分の一くらいです。

数字によるトリックのほかに官から民へ…、改革なくして成長なしなど、政治的キャッチフレーズのトリックはまだ乱発されています。これらのトリック、レトリックで、マスコミも呼応して、人々を小泉ブームに巻き込みました。熱狂的等質主義に陥ってしまいました。

どうすればいいか、政権交替に過度の期待を抱くよりも、私たちに大切なことは、ひとりひとりが政治キャッチフレーズのトリックを見破る力を持つことです。

小森 私は文学者として、トリック、レトリックにはめられないための手立てとして、二度の『なぜ』を発することが必要と考えます。例えば電車の中の「テロ警戒中：」とい

う広報デロップを見て、一度だけの『なぜ』ですと日本にもデロリストに攻撃される可能性があるからとなりますが、二つ目の『なぜ』を出す小泉政権がいちはやくブッシュの対テロ戦争を支持したからとなりません。

内橋 努力した者が報われる社会を：：といういかにもごもったもなフレーズを繰り返す閣僚がいました。誰も反対できないことばですが、誰が、どういう政治環境でいっているのかを見る必要があります。これは「一人勝ち社会」という状況を背景にいわれました。一〇〇人いて競争をあおりたてられ、対立の隙間にマーケットチャンスを探み、一人だけが利益を得て、敗れた九九人、そのなかに一人くらいは怠け者がいたかもしれませんが、九八人は努力しても敗れてしまった。しかし、君は努力が足りなかったのだといわれる：：そういう状況を背景にしています。このようなフレーズの吐かれるとき、アメリカでも日本でも行きつく先は超富裕層減税です。

雇用問題についてみてみましょう。これまで企業経営にとつて、雇用人員は遅行性指標だったのです。企業があらゆる努力をして、最後の最後を選択するのが人員整理でした。い

まは経営状態を示す数値がある一定のところへくると、たちまち被雇用者を切る、業績悪化のきざしが見えただけで首切りです。遅行性指標だったものが同時性指標となり、先行性指標になりつつあります。グローバルズは肥り、家計はやせる：：このような中で、どのようにして日本の景気を回復させるのでしょうか。

先程もお話したように、イザナギ越え景気るとき、私たち庶民にも雨水が滴り落ちるように効果がおよぶといわれましたが、恵みの水は落ちてきませんでした。だからいま世界のなかで日本が最も経済状況が悪いんです。派遣切りに遭った人々を含めて、失職したのに失業手当を受けていない人の数は全失業者中八割を占めています。ILOの調べによりますと、ブラジル、中国について第三位です。その率はアメリカで五五%、フランス、ドイツでは一〇%以下です。このような状況に日本は置かれていくわけで、個人の努力いかんで問題を解決できる時代ははるか

派遣村運動から みえてきたもの

小森 去年の年末から今年にかけ



て、日比谷で派遣村の村長として活動され、運動は全国に広がっています。派遣村活動から見えてきたものを報告していただけますか。

湯浅 年末・年初に派遣村というものをやりました、その後かなり各地で同様の取り組みが行われたのですが、大きかったのは、労働組合といっしょにこういう問題に取り組んだということでした。年末年始の派遣村自体が労働組合の方々がいいだして始めたことで、労働組合というのは、基本的にはたたかう準備ができていて人を相手にしていました。

私たちに生活相談する人たちは、どちらかというと、怒るエネルギーも持てないというか、むしろ、こん

なふうになってしまったのは自分が悪いと思っている人が圧倒的に多数なのですけど。そういう状態になって、どんどん追い込まれて声を上げる力もないという、そういう状態のなかで村にたどりつく人が多い。

いままでこの二つはあまり交わってはいなかった。だけど今回、『派遣村』をいっしょにやることで、こちらも学び点があったし、労働組合の人たち自身も、いままで自分たちが対応してきた層というのが、思ったよりも狭い、もっと周辺にたくさん声を上げられない労働者とか、労働者といえないような微妙な範囲にいる人を含め、居るということが分かったということをよく聞きました。今回各地に広まる中で、お互いにいろいろな気付きがあった。地域によって人数は違うけれど、どこでも派遣切りされたとか、それ以前からの人が相談に来て、こういう現実がもう日本社会の津々浦々ではつきりして、社会的にも取り組まざるを得ない雰囲気広がっている。

それまで、どうしても「そうなのは本人に何か問題があったのじゃないの」というところで話が終ってしまっていたのが、「そういう切れない現実がある」という中で、社会的にどうささえるのか？というふう

に視点がシフトしました。このことが私にはいちばん大きなことでした。

自己責任論のあやまい

小森 ある時期からこの国を制覇していた「自己責任論」で、バッシングもどきに強かったものが変わって、社会的に支えるべきだという主張になった。それは何が変わったからか？運動の現場から見えてどうですか？

湯浅 派遣で切られ路頭に迷う人がいままでもいたのですが、「普通に働いていれば、そんなことにならないはずだ」といわれて、それはしばしば反証のしようがありませんでした。今回は工場によって八割とか一〇割が、例えばキャンノンの宇都宮工場は六〇〇人の請負い労働者が日本最大の工場派遣の大手によって送り込まれていて、その人たちは半年前までは派遣労働者だったし、二年前までは偽装請負い状態だったわけですが、その人たち六〇〇人は全員がこの一月に解雇ですから、仕事で一度もミスしたことのない人を含めてそうなるとか、ちゃんと働いてなかったからだとかいえなくなりました。ミスとか怠けと関係ないことがはつきりしてしまったので、そ



ういつてきた人の言葉がいったん収まったということですよ。

会社は採用の時にいつも「長く働いてくれますか？」と聞いていたのですね。「うちは長く働いてくれる人を募集しています」と。「真面目に働いてくれれば三ヶ月経てば更新もするし場合によっては正社員に登用することもあります。ここをステップにぜひうまくやって欲しいので、とにかく休まないでください。」という採用しておいて、今回のようにバサッと切るわけです。自己責任論的なことをいう人は、いろいろな方を変えては「それは本人に問題があるのだ」といい続けるであろ

うと思われませんが、「そうではない、社会的な問題なのだ」ということに目を向ける人が増えていくことが大事で、その綱引きはずーっと続くと思う。私の立場からいうと、綱を、社会的な問題なのだという方に引っ張り続けることが活動になります。

小森 いま、湯浅さんがいわれたことは、内橋さんの「本来は、失業ということは最後にくるべきで、企業の社会的責任というのは、何とか解雇をしないよう努力することです、だけども、ちょっと先行きがおかしくなると、先行指標で派遣切りをしてしまう」につながります。まさにその実体があきらかになっていったと思います。

社会のありかたを変える

内橋 企業の雇用責任というものを認めない、そんなものはないのだという経済学。これは学問の姿を借りた特定の利益追求集団の考えですね。けれども、いま日本の主流派の経済学というものはそういう経済学

なのです。何をいうかという、労働雇用というものは派生需要だ、というのです。「ものを作ったり、あるいは企業活動をし利益を追求していくその過程で派生的に発生してき

たものである」。これを派生需要というのです。

誰にとつて最も利益になる経済学かということがわかりだと思つのですが、その生み出した現実と、いま湯浅さんを始め皆さん方がたかわざるを得なくなっている。

社会的排除の問題

湯浅 いまは職場でチャットでも使えないと思われたらおしまい、学校でチャットでもトロイと思われたらおしまい、社会のストライクゾーンが極めて狭くなってきていて、生きられている人も、生きられなくなってきたり人も、両方生きづらい。私はそういう社会はもう止めるべきだという気がします。

小森 内橋さんが三つ目に「社会的排除をしてはいけない」という話に係わります。

内橋 社会的な排除はなぜ行われるかということには背景があると思われまふ。つまり「彼は特別だ」あるいは「彼の働きにはどこまで頑張っても通常に達しないんだ」という、能力的、精神的、経済的、さまざまな社会的排除があると思ひます。

日本社会は永い社会的排除の歴史をもっていると思ひます。そのまま

続いている側面もあります。ですから、こうしたあり方を変えるためには、私たち自身のよほどの自己改革、ほんとうの意味で生まれ変わるつもりにならないと、なかなか難しいと思います。

活動の原点は渋谷の路上

湯浅 私は路上から始まっているので、野宿の現場が原点なのです。九五年度渋谷でしたけど、行っていくつかのことに驚いた。まず、私は大学が近くにありましたので、渋谷には以前から遊びに行っていたのですが、野宿の人、ホームレスがいるなどということは思ったことがなかった。ところが活動として行ってみると、(それでも当時は少なかったですが…) 一〇〇人弱がいた。ここにもいる、あそこにも寝ている。つくづく思ったことは、人間ってほんとうに見たいものしか見ていないと思った。関心がそちらに向かなければ、たとえ何が起これていようと、別に関係がないというか、危機感も感じないし何とも思わない。

そういう中で野宿の活動を始めて、九五年に一〇〇人もいなくなった野宿の人が九九年に六〇〇人になって、ものすごい勢いで増えていった。こ

れは全国的にもそうでした。その時に、世の中はどれくらいことになってきていると思った。

野宿の人って普通、失業したからって、ポツと野宿にならない。皆あがきますから……。とにかく、外で寝るなんて怖いし……。それでもどうにもならなくて、自殺もしなかった。そういう人が野宿をしている。食えなくなっている人の一〇・一〇%とかがそうなることはわかっていたので、これだけ増えているということとは、社会の中に食えなくなっている人が膨大な増え方をしていることだと思って、その時期がいちばん危機感を持った時期でした。でも、関心を向けてくれる人はほとんどいなかった。二週間にいっぺんくらい、野宿の人とずっと渋谷の駅前で街頭カンパ活動で訴えていたのですが、誰も足を止めてくれなかった。それでも、そういう社会はおかしいと思っていたし、このままでは社会がもたなくなると思っていました。

昔の日本をどう見るか？

小森 人間らしく生きられる社会はどうあるべきか？きょうのテーマに沿って、改めて人間にとって社会とは何なのか？

内橋 中谷巖さんは最近転向なさって、懺悔して告白したということですが、あえて申し上げますと、一九九五年中谷批判、これは中谷さんが私たちを批判してきたので私たちは再批判したのですが、そこで批判した域を越えていない、どこに帰ってきたかといえは、「昔の日本は良かった、日本の企業は和があった」という。皆さん年配の方も居られるが、日本企業に、ほんとうに人間としてのぬくもりとか絆とか、本当にあっただでしょうか？

自分がいつてきた市場原理主義は間違っていた、昔の日本に戻れ。というのですが、昔の日本はいまの派

遣村と変わりはありませんよ。幻想です。一方で十数年前には市場原理主義を唱えた。幻想から幻想へです。

日本企業社会の中で社会福祉が築かれてきた。そうした企業の外にある人々あるいは零細な企業や個人企業の人々は、そうした社会保障体系から排除されていたのです。それが戦後も続きました。戦前にはさらに、徴兵制度がありました。アメリカの場合、ベトナム戦争の後、徴兵制は志願兵制度へと代りましたが、志願兵がなぜ集まるかといえは、貧困ということが社会的な装置として組み入れられているからです。生存リスク格差と呼びます。

人間らしく生きられる社会とは？

内橋 私がいつているFとEとCの自給権、いまの派遣村の方々、またはそこで頑張ったボランティアの方々、次のステップは、食料とかエネルギーとか、あるいは社会的ケアですが、これを自分たちの手で自給していく、そしてそこに社会的に求められている有用な労働、働く場をつくっていくのです。自給権(圏)、権利であり一定のエリアでもあるのです。こういう社会に向けて踏み出



されるであろうと思います。

ものをつくれるのにつくらせないで買わせるという、グローバル化の戦略に乗ってはならない。安ければいいということではないのです。

痛手をこっむった

日本社会

小森 いま、内橋さんの中谷批判が出てきた、かつての日本に戻るのでもいいのか？ということと同じことを湯浅さんも実は「全て終身雇用制の企業におんぶに抱っこで、国や自治体がやるべき社会保障や社会福祉をきちっと制度としてつくってこなかった」と書かれています、企業が崩壊したとたん、何にも支えられないで放り出さる、それを活動を通して「貧困の可視化」をするといっています。

湯浅 とにかくいまは、職場の求める水準がどんどん上がって、その結果、職場から労働者がはじき易くされている。それで社会は非常に大きな痛手をこっむった。もう少し人々を直接支えていくとか、これは官僚もやったことがなくて分らないので、私たちが我々に合った形をつくっていくしかない。やりつくせないし、やりがいもある新しい挑戦がたくさんあります。

職無くば人間の尊厳も無い

内橋 湯浅さんの実際の活動はだいいじで、自ら感じるままに行動していらっしやるのが、私たちの心にしみる形で伝わってきます。

職無くば人間の尊厳も無い、そう私はいっしょに続けてきました。仕事、これを市場にまかせてしまっって、労働市場のビッグバンといったことを平気でいったわけです。そして労働のミスマッチだとか何とかいって。人々は自分の生きがいとか働きがい、きちんとかあう仕事を見つけたいのです。それに現在の仕事がちんとか対応しているか、というミスマッチもある訳でしょう。

もっと大きいのが、社会的有用労働のミスマッチなのです。社会が必

要としている、私たちが必要としている、例えば介護であったり、ケアであったり。にもかかわらず報酬が安いとかで人が集まらない。これもミスマッチなのです。

社会にとってなくてはならない有用な労働が満たされていない。社会的有用労働と現実の、そこにおける労働の供給、この乖離は埋めなくてはならない。

「武器輸出三原則」

緩和の動き

内橋 小森さんに伺います。これだけ9条を守ろう、25条はだいいじだ、といっしょけんめい頑張っているにもかかわらず、これが、政治の世界でどういう現象を生んでいるか？「武器輸出三原則」これを緩和しようという全く逆の動きになっています。これを雇用とか、経済活性化とか不況対策とかの名を借りてやる。これについてどう考えたらいいかお伺いしたい。

小森 いま進んでいる事態は、やはり改憲派のねらいというのが、一方で明文改憲、つまり9条二項の「前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない」。

これを取り外すということ、他方は、なし崩しの究極の解釈改憲で突破してしまおうという、この二つを車の両輪として進めてきました。

湾岸戦争のときに、アメリカは「日本は金だけ出して血と汗は流さないのか」とした。そのときの自民党幹事長が小沢一郎で、小沢一郎は憲法の前文を拡大解釈して「国連の安全保障会議の決議があれば完全武装の自衛隊を出してもかまわない」といい、国連平和協力隊法というのを海部政権が上程しましたが、これは廃案になりました。

その後、宮沢政権が自衛隊は9条二項に縛られるという路線に戻し、武器使用に関しては警察官の警職法を流用するという縛りをかけて国連平和維持活動、つまり戦闘行為が終って戦場でなくなったところに自衛隊を送るということで九二年にPKO法を通し、この間の自衛隊の海外派遣はこの論理で行われてきました。

今回は、海上自衛隊の「護衛艦」、軍事上という駆逐艦ですが、自衛隊だから護衛艦という名前に切り替えているだけです。やはり大砲を載せています。それで威嚇のための武器使用をやってしまったらどういうことになるか？なし崩しの解釈改憲になります。海上自衛隊に武器使



用させ、そして死者が出ることでしょ
う。いままでの護衛艦には霊安室は
なかったのに、ソマリア沖に派遣の
二艘は霊安室が付いています。です
から、なし崩しの解釈改憲をやりつ
つ、しかし明文改憲も車の両輪でやっ
ていく。

西松建設で小沢一郎がねばったこ
となどで人気が下がってくる。「大
連立」で福田康夫と小沢一郎がやっ
たことがやれるようになる。そうい
ういろいろな狙いが全部できて、
そして武器使用三原則も変えてしま
おうとなる。

内橋 いまおっしゃったそのシナ
リオは誰が書いている？

小森 すくなくとも安倍政権が崩
壊して、福田康夫総理大臣になって、
テロ対策特措法の権限がまさにイン
ド洋で切れたその日に行われた小沢
一郎と福田康夫の党首会談で、大連
立がぶち上げられた。その仕掛け人
は中曽根康弘と渡辺恒雄だったこと
は、渡辺恒雄が自慢げにいつている。
さらにいえば、九条の会を名指し
で対抗するために草の根の運動をや
らなければいけないというふうにい
って、それをスローガンにして二〇〇
八年三月新憲法制定議員同盟が出来
たが、その民主党の代表が鳩山由紀
夫ですから、今回の民主党代表の選

出もそのラインですっとシフトして
きているのではないか。ただそこに
加えて、アメリカと深く結びつい
た高級官僚の存在もあるのではないか？

自衛隊志願者や 現役隊員のこぼれ

内橋 湯浅さんにちょっと伺いた
いのですが、派遣村に駆け込んだ
人とか若者とかで、自衛隊志願者
はどうですか？

湯浅 直接に私にたいしていわれ
たことはないですけど、野宿の人
の中に自衛隊経験者はとても多いで
すね。それはやっぱり食えなかった
からですね。最近は一〇代前後で食
い詰めてくる人は少なくないです
から、やっぱり堤未果さんが「ルポ貧
困大国アメリカ」で書いていること
ですね。基本的に日本でも当てはま
ると。…だつて仕事に就こうと思っ
て、コンビニのレジ打ちで時給八〇
〇円で五年一〇年経って時給が一〇
円上がるかどうかで、そういうの
やり続けるか、工場の派遣でいつ切
られるかわからないというなかで、
とりあえず今日明日食えるという状
態でやっていくか、どっちかしか
ないじゃないか、どっちかしか
ないな」としか私も答えようがな

いので、だったら自衛隊にいつてく
る、といわれたら、そんなことやめ
ろといえないというか、いっても説
得力がない。「そりゃ、あんた食え
てるからじゃない？」といわれたら
おしまいですから。そういうふう
に聞かれる日が必ずあるだろうと私は
覚悟しています。

実際、もう例えば、医者になりた
いけど、家には十分なお金のない人
は防衛医大にいつているし、そうい
う意味では、もうすでに地方ではど
んどん起きています。いままでは高校
がその防波堤の役、就職説明会の時
に、自衛隊の人はいっしょに説明さ
せないとか、そういうところで踏み
とどまっていたところがあるよう
ですけど、それも私立から崩れ始め
ているようです。

そうなっていくというのが、25
条の側から見た9条の問題、私の活
動の現場から見た9条の問題です。

小森 これは非常に印象的だった
のですが、全国を九条の会の講演で
回っていますとね、会場に自衛官の
方がいらっしやる。それで、佐官級
の方はちゃんと「私は自衛官ですけ
ど」と名乗って質問してくださいさ
る。ある千葉の会場でそういう方がいら
して「小森さんの話を聞いてよく分
かりました。九条の会にぜひ頑張っ

てもらいたい。9条二項が変えられ
ないで、そして自衛隊が海外で武器
使用していない段階だと、自衛隊は
職場なのです。だけど二項がなくなっ
ちゃうと職場になりますから職場で
なくなります」といわれました。こ
のあたりが、いまどきが問われてい
るのかということ、私たちが大き
く幅広く連帯を進めながら、その政
治の正念場をいっしょに頑張ってい
く大事なところではないかと思いま
す。

今日は長い間ありがとうございました。



当日のカンパ

ありがとうございました。

湯浅さんが事務局長をされている
「反貧困ネットワーク」へのカンパ、
475,000円、集まりました。
早速、送金させていただきました。

参加者の感想

多くの感想ありがとうございます。
いくつかを紹介します。

★点数の高いものや見た目がよいもの

が認められ、自分が好きなことや自分らしさを表現できず、マニュアルに沿って機械的にやらざるを得ないことが多い社会に疑問を持っています。内橋さんがトリックやレトリックに騙されないこと、見抜くことを強調されていました。たとえ見抜いたとしても、そのトリックやレトリックが大多数の人たちに称賛される社会ではむなしなものになってしまうのではないのでしょうか。会社員ですが日々、同調したくないものに同調し、気配りに身をすりへらす時間が本質的な生き方か、ただ人生はシナリオとパフォーマンスの連続と割り切るしかないのか、希望の持てない社会とつづくと考えます。あと、数字に騙されないためにはどうすればよいかといったことをもっと詳しく知りたいと思いました。

(200代)

★現実の社会をどのように見るとい

かりやすかった。とくに内橋さんによる「人が人らしく生きるため」に必要な4条件は、いかに実現するかを考えさせられた。大学で経済学部だったので「企業は利益追求のためにある」という前提への批判は興味深かった。最近ではCSRだなんだと企業もまぢかの利益だけでないものに目を向けるようになってきたが、あくまで副次的なものに感じる。トリック、レトリックを見抜く難しさはこれだという解決法がないのが難しい。とくに思い起こされたのが、小泉時代。普段、政治に興味のない友人でも「小泉さんでいいじゃん」といっていた。興味をもたせるという点で、彼の能力は抜きんでていた。その点は参考にするべきでは。(内実のせひは置いておくとして)

(20代女性)

★武器輸出三原則の件は、政治や経

団連がいつてるといことは一部の人間がまた儲かるということを予想させる。ソマリアの軍艦、出すことだってなし崩しの一角です。どうしてこう恐ろしい方向に日本



は向かっているのでしようか。小泉さんはブッシュと打ち合わせて民営化してはいけないことを民営化し、タガをはずして多くの人を日本に住んでいられる人を買いたたいているのでしょうか。25条が飾りのように最近見えます。湯浅さんの清さはどうしてああいう風にできるのでしょうか。応援しています。湯浅さんが書いていたので「貧困大国アメリカ」を読んでいます。今。(40代女性)

★内橋さん、小森さん、湯

浅さんと世代の違う3人のお話が聞いて面白かったです。ことに湯浅さんの現場からのレポートは本当に参考になりました。学問系の内橋さんとの両方に適切なコメントを結びつけながら司会進行していった小森さんは見事でした。(50代女性)

★「みたいものしか見ない」の言葉

が印象に残りました。現実には騙されない、そのことの重要さが今求められているということを感じました。内橋さんの説得力ある話が何よりも圧倒的でした。

(50代男性)

★「人間らしく生きられる社会を」求めるその人びとの人間としての

暖かさを肉声を通して改めて実感しました。そういう人びとの大海と向かう流れの小さな一滴であっても、自分自身も自分のできることで、参加していきたいと思いをあらたにしました。ありがとうございます。自衛隊の教官だった知人がつい先日亡くなりました。「9条がある限り、教え子の自衛官たちが戦死することはない。9条をなくしてはいけない」とつぶねいっていました。

(60代男性)

★内橋先生のお話は要約がハッキリしていて感銘です。トリックとレトリックを見分けることや権力者のもっともらしい話には必ず「裏」があると疑い、その裏を見抜いて市民として発言を続けること、重要性を認識した。湯浅さんの具体的な話に現実の厳しさを教えられました。(70代 男性)

★大変実のある話だった。9月まで

にある衆院選挙、これに市民一人一人が誰を選ぶかこれも大きな日本に分かれ目になると思う。少しは明かりがある方向に、私たちの1票をつかわなければと思っています。湯浅さんのような活動を見習って私も生きていきたい。

(70代女性)

九条の会講演会

——加藤周一さんの志を受けついで——
に参加して

六月二日、日比谷公会堂で開かれた九条の会講演会は、会場の周辺を街宣車が何度も走るなか、二〇〇〇人を越す熱気に包まれて開催されました。

昨年十二月に亡くなられた九条の会呼びかけ人の加藤周一さんの志をひとりひとりが受けつこうという会でした。

井上ひさしさん、大江健三郎さん、奥平康弘さん、澤地久枝さん、それにパートナーである矢島翠さんが、それぞれ加藤周一さんとの関わりを通して、加藤さんが私たちに残してくださいました。また、加藤さんが作った詩に別宮貞雄さんが作曲した「さくら横ちよう」という歌を、村上弦一郎さんのピアノ伴奏でソプラノの大橋ゆりさんが演奏されました。

井上ひさしさんは「加藤周一さんの書かれた本の中にある知恵は汲みつくせないもので、その知恵を少しでも学びたい」と。

また大江健三郎さんは最近阿修羅展を見て、十大弟子像のリアリティと加藤周一さんの知性について話されました。

奥平さんは、ある会議で加藤周一さんと同席したおり、ごく自然にドイツ語とフランス語で話さているのを見たときの驚きを語り、加藤周一さんが広い国際感覚と、深い知性の人であったことがわかりました。

澤地久枝さんは、若いときに出会った加藤周一さんの小説に触れ、若い自分は戦争の残酷さ、悲しさを訴えたこの小説に何も感じなかったが、いま読み直してとてもよく理解できる。だから「若い人はだめだ」というのはやめようと訴え、若い人の中に積極的に入って訴えようとした加藤周一さんの姿勢のなから九条

85%が「9条を守る」に初めてのシール投票

5月の9の日行動は、9日でなく3日の憲法記念日におこなっています。

今回、初めてシール投票をおこないました。

いつものリーフレットを配布すると同時に、シール投票を実施し、150名の方々が協力してくださいました。

結果は次の通りです。

憲法9条を守る	127人	85%
わからない	8人	5%
変える	15人	10%

9条だけは絶対守るという人が85%いたことは心強く思いましたが、「変える」に貼った人のなかには、軍隊は必要など強硬な意見の若い男性が数人いたことには驚きました。

☆毎月の9の日行動

9日 平日 15時～

土・日・祝日 11時～

小町通り・鳥居前 九条の旗の前集合



の会が私たちと若者をつなぐ架け橋になってほしかったのではないかといいていました。

矢島翠さんは、晩年の加藤さんは読んだり書いたりから、実践活動へ軸足を置くようになっていたと述べ、九条の会の運動は全国に広がった運動だが、ピラミッド型の運動としてではなく、ゆるやかに横並びに手を結んでいくことを願っていたとのお話がありました。

最後に小森陽一さんより、今後の九条の会の方向性として、全国活動

交流集会からブロックごとの集会にしていくこと、憲法セミナーは引き続き全国規模で取り組むことが伝えられ、大きな拍手のなかで閉会しました。